慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マリアンネ・ウェーバー著 大久保和郎訳 マックス・ウェーバー II
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.8 (1966. 8) ,p.905(103)- 906(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19660801-0103
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660801-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

門書にするという目的は充分はたされたといってよかろう。必要な範囲で、微分方程式、定差方程式の解法までのっているのには恐れいった。著者が最初に考えたように、この後に同じ位の分量の中期経済計画その他の実例の解説が来たならば、さぞ面白いものになったろうと残念である。さて一方限られた紙数にかなりつめこんだために説明がやや不親切・不充分とみられる部分がないでもない。またつまらないミスプリント、たとえば式の中にある変数が落ちていたり、参照式番が違っていたり、というのも、初心者を読者に想定している場合はとくに、気をつけなければならないようにおもう。

ともあれこれだけの入門書を著した宮川氏の広い学識に敬意を表する。この書物はまた、経済学徒の中でもこれから「計量」とはなにかを知ろうと望む人、あるいは、すでに多少の知識のある人でも、それをまとめて見ようと思う人には、有用なものであると信ずる。

（日本経済新聞社・昭和四十一年二月刊・新書判・二三七頁・二八〇円）

新刊紹介

マリアンネ・ウェーバー著
大久保和郎訳
『マックス・ウェーバー II』

これは、さきに紹介したもの（第五七巻第一〇号）の邦訳第二部である。原著の後半部、第十一章から十九章および終章までを含む。つぎのような内容から成っている。

第十一章　拡張、第十二章　社会的行動と闘争、第十三章　美しい生活、第十四章　旅の印象、第十五章　母、第十六章　奉仕、第十七章　革命前の時代の政治家、第十八章　インテルメッツォ、第十九章　革命後の時代の政治家、終章。

はげしい神経性の病気のため、大学の教職を去らなければならなかったウェーバーは、恢復後、アメリカを旅行して帰国したが、その後、友人ブレンターノや先輩のシュモラーの、大学教授としての復職の懇切な助言にもかかわらず、しばらくは到底その気になれず、一九〇六年、母親と妻マリアンネを伴ってイタリアへ旅行をした。そして、そこでの美わしい風光に接して、心も和らぎ、新しい闘いへの準備をととのえたのである。一九〇八年の夏頃になると彼はすっかり健康を恢復し、研究への意欲を燃やすのであるが、しかし、この頃から、ドイツ帝国＝ホーエンツォレルン体制は、内外の危機に直面するとともに、ウェーバー自身もドイツ民族の将来への不安や憂慮が、第一次世界大戦を契機として次第に深まっていった。すなわち、バルカンをめぐるロシアとの衝突、国民自由党と社会民主党との対立が醸し出す政情不安、しかもそれに加えるにドイツ皇帝ウィルヘルム二世の議会の権限を無視した発言や行動、これらはウェーバーの愛国心をゆさぶったのであって、第十二章はこうした彼の不安と動揺とそして憂愁、学者としてよりは政治家としての自分を意識しつつも、これを抑制した時期として描いている。国民自由党の指導者ナウマンと接近したのもこの頃である。

一九一〇年から一四年第一次世界大戦の勃発までの時期は、故郷での平穏無事の生活であり、再度フランスを中心とする南ヨーロッパへの旅行に象徴されるような満ち足りた美しい生活であり、いわば、「嵐の前の静けさ」ともいうべき時期であった。

この第二部の圧巻ともいうべき部分は、一九一四年、第一次世界大戦勃発以後における彼のめざましい活動である。すなわち、大戦がおこるや、彼は直ちに、祖国への義務、全体への没入、自己抛棄の時として志願し、予備陸軍病院委員会における監察将校の職に補されて、精力的な活動がはじまる。第十七章は、ウェーバーの愛国的な心情にもかかわらず、次第に敗色を濃くしていく祖国ドイツ、それに拍車をかける軍部の横暴、政治家の無能、革命を目指す左翼社会民主党へのはげしい憎しみといらだち、まさしく、学者なるがゆえに政治的行動をきびしく抑制するウェーバーの苦悩が、彼の書簡を通じて克明に追求されている。

最後に十九章は、一九一八年の敗戦とドイツ革命のなかで、ひたすら、ドイツの将来に想いを秘めながら、議会制民主主義を擁護すべく、一度は、ドイツ民主党から大統領に立候補しようかと迷い、周囲からもそうした眼でみられるなかで、きびしく政治の慾求を、

まさしく社会科学者としておさえなければならなかった。

一九一九年、ミュンヘン大学へ招かれて、十数年後に再び大学の講壇に立ったのであって、「職業としての学問」はこの時期の産物である。ウェーバーの立場にたいする批判はともあれ、この伝記は、社会科学の研究者が一度は読むべき古典といえよう。（みすず書房・一九六五年五月刊・A5・二七一頁・九五〇円）

—飯田　鼎—

＊　＊　＊

西岡　孝男著

『日本の労使関係と賃金』

本書は、すでにわが国の企業別組合にかんするすぐれた研究として知られている「日本の労働組合組織」（JIL文庫）の著者、西岡氏の論文集である。従って、日本の労使関係にかんする特殊性の追求という強烈な問題意識によって一貫しているといっても過言ではない。但し、論文集としての制約から、題名の如く、厳密に労使関係のみの論文だけでなく、著者の関心のあるいろいろかの問題にかんする論文をも含むのであることは当然である。つぎのような内容から成っている。

第一章　労使関係における日本的なもの
第二章　労働組合法案をめぐる十年間——日本賃労働史の一断面——
第三章　朝鮮人労働者考
第四章　ソシアル・ダンピング問題といわゆる日本の〝低賃金〟について
第五章　日本型賃金構造の分析視角
第六章　労働者論——労働行政史的視点から——

第一章において、著者は、わが国の労使関係の特殊性を形づくるものとしての賃労働について、従来の通説、たとえば〝出稼型〟を中心として検討している。結局、封建遺制をどのように位置づけるかという問題に帰着するのであるが、著者は、日本の特殊な労使関係を特徴づけるものとしての企業別組合を、矢島悦太郎の共同体論、和辻哲郎氏の「風土」などの視点から考察され、とくに丸山真男氏の思想、〝タコツボ化〟、中根千枝氏の「縦割り社会」の構想に、その根拠を見出しておられる。しかし結論としてはあまりはっきりしない。

つぎの労働組合法をめぐる十年間はまことに力作であるし、資料的に高い価値をもっている。一九二五年の社会局案が、資本家のはげしい反対にあって崩壊していく過程が、豊富な資料を通じて、きわめて詳細に且つ生き生きと物語られている。第三章は、日本資本主義史上に特異な役割を演じた朝鮮人労働者の運命を描いており、著者の学殖の深さを感じさせるとともに、民族問題の重要性を認識せしめるのに役立つ。

第四章および第五章は、いずれも賃金問題にかんする研究で、前者は、日本の低賃金政策の基盤を追求し、後者は、戦後の賃金格差を、戦前との比較において論じている。第六章は、労働者の役割を、戦後の労働行政の変遷のなかで評価している小論で、そのいずれをとってみても、それぞれ珠玉の論文であるが、やや随想風で、理論的な整理という点では、まだ十分ではないと思う。（未来社・一九六六年四月刊・A5・二四六頁・九五〇円）

—飯田　鼎—

＊　＊　＊

J・ロビンソン著
宮崎義一訳

『経済学の考え方』

この本は一九六二年に The New Thinker's Library の創刊第一号として出版された"Economic Philosophy"の邦訳である。この本で著者ロビンソンは、経済理論が真に有効であるためには、そのなかにひそんでいるプロパガンダの部分と科学的部分との関係をはっきりわきまえ、そのうえで科学的な部分がどの程度納得のゆくものであるかを経験にてらしてたしかめ、最後にその結果をわれわれ自身の政治的見解とむすびつけるようにすべきであるという見解を主張している。その論証のために、古典学派の価値概念、新古典学派の効用概念、そしてケインズ学派の雇用概念をとりあげ、そこにふくまれている形而上学要素をきびしく摘出し、そのもっている意味をみきわめようと努めている。そこで、価値概念ではあらゆる商品が正当で公正な価値（抽象的人間労働量）で交換されているという形而上学を、効用概念ではすべての個人を一単位とみなして、その効用加算である社会全体の全部効用の極大を政策目標とする功利主義、平等主義、そして自由放任主義のイデオロギーを、ケインズ学派の雇用概念のなかには完全雇用を至上命令とする形而上学を、彼女はみいだしている。しかもこのような摘出のプロセス全体をとおしてこれらの概念においては共通であり、中核となってきたものは先進国中心のナショナリズムであることをあばきたてている。このように彼女の経済学に対する論及はきわめて手きびしく、否定的であり、破壊的であり、そして彼女自身、この本の主張は「安住の地」と断定できるものは存在しないという点の確認にあると述べている。また、いままでに経済学のあたえた解決は、それによって押しのけられてきた神学者の解決同様、虚妄のものであるとまで断言している。しかも現在われわれにとって必要なことは、前進をはばんでいる時代おくれの形而上学の朽ちかけた残骸を一掃することに希望を託することであり、貨幣によって測定されうる価値のみが重要な唯一の価値であるかのようにみせかけるイデオロギーとたたかうことであると言っている。

さてこの本を読みながら、ある人々はこの議論を興味深く、これまでの自己の学問体系の基礎に対する反省を感じとるであろうが、ある人々は抵抗感なしには頁をくることができないであろう。現在まで経済学がすすんできた道程はそのような形而上学的要素を消滅させ、科学体系として基礎を確立する努力ではなかったろうか。そしていま経済学は自然科学と同じように科学性をもっていたはずではなかったろうか。しかし、たしかに素朴な経験的基盤にたって経済学の基礎をたしかめてみるとき、これまでのわれわれがもっていた、このような確信を強く主張できない不安定さを多くの人々は感じるであろう。それが、ある人々には反省を、ほかの人々には抵抗をうみださせるのかもしれない。彼女の主張の当否はともかくとして、この本は、ふとこれまでなにげなくかえりみることもなかった自分の足許をてらしだす機会をあたえ、それをみつめさせてくれる本である。

あとがきで訳者がJ・ロビンソンの経歴と彼女の思想の遍歴とを紹介し、この本が出てくる思想的背景をえがいているが、このあとがきは、彼女がもつこの本の意図を一そう明